

新世紀ミュージアム

一世紀以上前のケルン市に、非ヨーロッパの諸文化を紹介する施設として誕生した市立の民族学博物館。移転をきっかけに、二〇一〇年に大きく生まれ変わった。新しいものと古いもの、身近なものともめずらしいものの出会いを来館者に五感で体験させる展示をおして、自文化を相対化し、多文化共生社会がはらむ諸問題を解決する視点を提示する。

舌を噛みそうな名前であるが、地元では略称の RJM とか、Weltkulturen Museum (世界文化博物館) とよばれている。カタカナで正式名を書くこと長いので、RJM を使うことにする。二〇一二年には欧州評議会博物館賞を受賞しており、個人的にも今まで見てきた博物館のなかでトップ3 に入らない、好きなミュージアムである。

ルーツと再生

この博物館の出発点となったのは、ケルン出身のドイツ民族学者ヴェルヘルム・ヨスト(一八五二―一九七)が世界中を旅して集めた民族資料である。彼の死後、コレクションを受け継いだ姉のアデル・ラウテンシュトラウフが、弟と夫の苗字を冠した名前にすることを条件に最初の博物館建設経費を出資し、一九〇六年に

開館した。同じくケルン出身の考古学者マックス・フォン・オッペンハイマー(一八六〇―一九四六)の資料もここに所蔵されている。

古いコレクションをもつヨーロッパの民族学博物館の悩みは、所蔵品が年代物と化して、建物自体も由緒があり、資料的にも空間的にも歴史に制約されているという点である。しかし RJM は比較的最近、建物ごと生まれ変わり、展示の文脈を再構成し、現代社会の視点をとり入れることに成功している。

再生の過程は決して単純なものではなかった。そもそも移転のきっかけは、災害である。旧博物館は一九九五年に起こったライン河の大洪水によって地下収蔵庫がかなりのダメージを受け、カビの被害がひどくなり維持が難しくなった。ケルン市

徹底した通文化展示

みんなくをはじめ、世界の民族学博物館は地域別の展示がされることが多いが、RJM は再建の際に地域ごとの展示区分をいさぎよくとっ払い、地域横断的なテーマ別の展示方針を貫いた。テーマとしてとりあげられているのは、「扉」、「住まい」、「衣服と装飾」、「死と死後の世界」、「信仰」などである。セクションによってはさらにサブ・テーマに分かれており、人間の営みの共通性と多様性を文化の比較によって見出すしくみになっている。

「住まい」のセクションの例を挙げると、トルコ、カナダ、ニジェール、ニュー



引き出しを開けると、テーブルの上に移住に関するトピックが展開する仕掛け
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影

ギニア島などの伝統的な住居が再現されている。

巧みな展示手法

みんなくのリニューアルの際にも、モノを見せたい、でも背景情報も十分に提供したいという博物館学的なジレンマに悩んだのであるが、RJM はその問題を一工夫凝らした展示手法でうまく解決している。文字情報や画像パネルと展示資料のバランスがよく、パネル類がモノ自体を見るときは邪魔しないように配慮されている。また、電子端末やメディアの使い方が、とにかく「粋」である。前述のダイニングテーブルの引き出しのように、どれも機械っぽさがなく、さりげない仕掛けなのである。ボタンを押す、タッチパネルを触るといったような操作でなく、引き出しを開ける、本のページを

めくるといったようなアナログな動作がスイッチになっているところがにくい。みんなくはビデオテープや電子ガイドのような「メカメカしい」装置を得意としてきたが、次世代の情報展示を作る際には、RJM のさりげなさも参考になるかもしれない。

キュレーションを担当する専門研究スタッフは現時点で七人だけであり、機材自体にもそれほどお金はかけていないと聞いた。展示デザインを手掛けたのはアトリエ・ブリュックナーという設計会社だそうである。優れたデザインと優れた学芸スタッフの比較的小ぢんまりとしたチームが知恵を絞って作りあげた、秀逸な博物館である。



キャプションの横にあるボタンを押すと、ケースの背面に写真や解説が表示される。表示なしの状態、資料自体をじっくり見ることできる
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影



保存や修復など博物館学的な課題に触れる展示の部屋もある
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影